

## 2024年1月14日 仙川教会 サム上 3:1~10、ヨハネ 1:35~51

イエス・キリストは、私たちと共にいてくださいます。神さまはその愛する独り子を私たちに与えて下さり、イエス・キリストによって私たちの父となってくださって、神共にいてくださる喜びの人生へと招き入れてくださっているのです。

イエスさまは、その地上の公生涯において、一人一人に声をかけて弟子に招き、弟子たちと共にいてくださいました。新約聖書にある四つの福音書のどれにも、イエス・キリストは弟子を招くことから地上での福音宣教の旅を始められたことが記されています。マタイ、マルコ、ルカの三つの福音書は語ります。イエスさまはガリラヤ湖のほとりを歩いておられたとき、二人の漁師、シモンとその兄弟アンデレに出会います。イエスさまは二人に「わたしについて来なさい。人間を取る漁師にしよう」と呼びかけられ、漁をしていた二人は、すぐに網を捨ててイエスさまに従いました。それからイエスさまは、別の二人の兄弟ヤコブとヨハネに出会います。彼らもガリラヤの漁師で、網の手入れをしていましたが、イエスさまに呼びかけられると、この二人もすぐに網を捨て、父を残してイエスさまに従ったと描かれています。マタイ、マルコ、ルカ福音書では、最初の弟子の招きは突然です。普通に漁師をして暮らしていた彼らのところに、イエスさまが何の前触れもなく突然やって来て、「わたしについて来なさい」と呼びかけられ、そのイエスさまの招きの声に答えて弟子たちは、すぐにすべてを捨てて従った。それがマタイ、マルコ、ルカ福音書に描かれている最初の弟子の招きです。

しかし、ヨハネによる福音書に描かれている様子は、それとはかなり違っていています。最初の弟子になった登場人物の名前も、弟子になる具体的な経緯も違っていています。ヨハネによる福音書によれば、一番最初にイエスさまに従ったのは、洗礼者ヨハネの弟子の二人でした。全く何もないところに、イエスさまが突如として現れたというのではなく、その一番最初には、洗礼者ヨハネの証しがありました。

ヨハネによる福音書 1章 35節から。ある時、洗礼者ヨハネの二人の弟子は、先生であるヨハネと一緒にいた時に、歩いておられるイエスさまを見かけました。洗礼者ヨハネは二人に、イエスさまが何者かを話して聞かせます。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ。」「あの方こそ神の子である。」ヨハネの弟子であった二人は、そのヨハネの言葉を聞いて、イエスさまについて行きました。その二人のうちの一人は、シモン・ペトロの兄弟アンデレであったと記されています。アンデレは漁師というよりも、洗礼者ヨハネの弟子として描かれています。もう一人の弟子の名前は記されていません。アンデレともう一人は、その時、洗礼者ヨハネの弟子だったというのですから、もう既に、何よりも神の御心を尋ね求める歩みを進めていたということでしょう。そしてその時、それまで従ってきていたヨハネを捨ててというよりはむしろ、先生であるヨハネから勧められて、イエスさまについて行ったのでした。

ただイエスさまについて行った。新共同訳は「イエスに従った」と訳されていますが、「イエスについて行った」と口語訳や新改訳のように訳した方が、誤解なく受け取れるように思います。「従う」と言っても、英語でいうと **obey** ではなく **follow** です。二人がここですぐ

イエスさまに「obey 服従した」と言っているのではなく、明らかに「follow ついて行った」だけです。アンデレともう一人の弟子は、洗礼者ヨハネの証しを聞いたその一瞬で、イエスさまこそ神の子だとわかったわけではありませんでした。先生を変更する決心をすぐに固めたのでもなく、勧められてなんとなく、結構気軽について行っただけなのではないかと思えます。

その二人がついて来るのを見て、イエスさまは「何を求めているのか」と問いかけられました。人の心の奥の奥まですべてご存じのイエスさまです。それを知らないはずはありません。しかし、「あなたは何を求めているのか」。イエスさまはよく「何をしてほしいのか」「あなたは何を求めているのか」と問いただされます。それは、自分の心の中にあるものに、自分自身でしっかりと向き合うことを求められているのだと思えます。

その二人は、イエスさまの問いかけに、こう返事をしました。「先生、どこに泊まっておられるのですか。」イエスさまの宿泊場所を知識として知りたいというよりも、もう少し話が聞きたいから一緒に行ってもいいですか、という意味を込めているのでしょう。イエスさまが何者なのか知りたい。自分で見極めたい、ということなのではないかと思えます。イエスさまは「来なさい。そうすれば分かる」と言われました。二人はついて行って、そしてその日はイエスのもとに泊まったのでした。一緒に泊まって、おそらく一晩イエスさまの言葉を聞く中で、二人の心が信仰へと少しずつ動いたのではないかと思えます。洗礼者ヨハネの言う通りかもしれない。この方は特別な方に違いない。洗礼者ヨハネの言うとおりに、「神の小羊」で「神の子」だというのはきっと本当だ。二人はイエスさまの言葉をずっと聞いていく中で、イエスさまの後にずっとついて行こうという思いが芽生えてきたのだと思えます。御言葉を通して少しずつ、イエスさまと共に歩む意志を固めていったのではないかと思えます。マタイ、マルコ、ヨハネ福音書での描かれ方と違って、ヨハネによる福音書での弟子の招きは、決して突然何かに取り憑かれたような一瞬の劇的な転換として描かれてはいません。二人はまず、信頼していた先生ヨハネの証しを聞きました。ヨハネの言葉によってイエスさまに興味をもち、まずなんとなくついて行っただけでした。そのなんとなくついて行く中でイエスさまの声を聞き、イエスさまとしっかり向き合いたいと思うようになり、イエスさまの話をしっかり聞いて、弟子となった、と描かれているのです。

そしてこの二人のうちの一、アンデレが弟子となってまずしたことは、すぐにすべてを捨てることではなく、家にもどって自分の兄弟シモン・ペトロに会うことでした。アンデレは兄弟シモンに「私たちはメシアに出会った」と証ししています。メシアとは救い主のこと。旧約聖書の原語ヘブライ語の「メシア」は、ギリシア語では「キリスト」です。アンデレはまず、兄弟シモン・ペトロに対して「私たちはメシア、キリスト、救い主に出会った」と証ししています。「私は」と一人称ではなく「私たちは…出会った」と複数形で語っているのは、それだけアンデレと兄弟シモンの交わりが深かったということでしょうか。イエス・キリストを救い主だと信じることは、それまでの人間関係を切って孤立することではなく、むしろ人間関係を強めるということかもしれません。「私」一人が信仰へと導かれることは、

「私たち」の信仰の第一歩だということかもしれません。

それからアンデレは、兄弟シモンをイエスのところに連れて行きました。兄弟アンデレの証しと誘いによって、シモン・ペトロはイエスに出会うことができました。それからペトロは自分自身でイエスさまの声を聞いて、イエスさまに答えて弟子となり、いつもイエスさまと共にいる人生に入ったのでした。

イエス・キリストを信じる者は皆、イエス・キリストの弟子です。私たちは皆、主の招く声を聞きとって信仰を与えられて信仰生活をスタートしました。神の愛を喜んで受け取り、神を愛し返すようになったのは、ただ神さまの業、たしかにただ主の御言葉の劇的な力です。しかし、その主の御言葉を聞き取れる環境が準備されていたことを、今日のヨハネによる福音書の弟子の招きの物語は思い出させてくれます。最初に、イエスさまのことを紹介してくれた人がいました。親や兄弟、家族がイエスさまのことを教えてくれたかもしれません。身近な友人、たまたま接した見知らぬ人、あるいは書物だったかもしれません。そのおかげで、イエス・キリストという存在をまず知って、イエス・キリストに興味をもち始めたかもしれません。そしてなんとなく何の気なしに出席するようになった礼拝で、御言葉を聞く機会ができてきて、ある時、主からの語りかけが私への御言葉だと聞こえてきて、信じたいと思うようになった。信じる者に変えられた。そんなスタートだった方も私以外にも大勢いらっしゃるのではないかと思います。それぞれの信仰のスタートの一番最初には、証しによって御言葉が聞こえるところまで連れて来てくれた人がいたのです。

旧約聖書の少年サムエルを、御言葉が聞こえるところまで連れてきてくれたのは、祭司エリでした。今日の旧約聖書箇所は、少年サムエルが主の呼びかけを始めて聞き取った場面ですが、このように主の言葉が直接臨むという時でさえも、人間の証しが必要だと言えるかもしれません。少年サムエルが祭司エリのもとで仕えていた時、主はサムエルを呼ばれたのですが、サムエルは主の言葉とは気づきませんでした。サムエルはその主の呼びかけをエリの声だと思って、エリの元に行き「お呼びになったので参りました」と言います。主は三度サムエルを呼ばれましたが、サムエルは二度目も、三度目もエリの元へ走るだけで、主の言葉として聞き取ることはできませんでした。少年サムエルが初めて主の呼びかけを聞き、それに答えることができたのは、それが主の言葉だとエリに教えられた後だったのです。

新約聖書に戻ります。ヨハネによる福音書で、洗礼者ヨハネの弟子であった二人、アンデレともう一人がイエスさまの弟子となり、それからアンデレの兄弟シモン・ペトロが弟子となりました。そしてその次に、ヨハネによる福音書でその次にイエスさまの弟子となったのは、フィリポでした。フィリポの場合も、ただ突然にイエスさまが現れて、すぐにフィリポが弟子になったという話ではなさそうです。イエスさまがガリラヤへ行こうとした時、イエスさまはフィリポに出会って声をかけられているのですが、フィリポはそれ以前にイエスさまのうわさを耳にしていたと思われれます。44 節に「フィリポは、アンデレとペトロの町、ベトサイダの出身であった」とありますから、先に弟子となっていたアンデレとペトロの証

しが伝わっていたと推測できます。イエスさまに呼びかけられたとき、フィリポは全く何も知らなかったのではなく、イエスさまのうわさを前もって聞いていたので、イエスさまの呼びかけに応じてついていくことができたのだと思います。

その次にイエスさまの弟子となったのは、ナタナエルでした。ナタナエルという名前はヨハネによる福音書にしか登場しないのですが、他の福音書のバルトロマイと同一人物ではないかとも言われています。ナタナエルは、フィリポの証しによってイエスさまを知っていますが、その反応は否定的なものでした。フィリポは、イエスさまこそ、モーセが律法に記し、預言者たちも書いている方なのだ、すなわち、旧約聖書が証する救い主だと伝えます。けれどもナタナエルは、「ナザレから何か良いものが出るだろうか」とフィリポの証しを信じませんでした。それでもフィリポが「来て、自分の目で見てほしい」と言うので、自分の目で見極めようとイエスさまに近づいて行きました。疑いの心で近づいていったのです。しかしそこでナタナエルは、イエスさまから言葉をかけられて、イエスさまの御言葉によって信じる者へと変えられたのでした。

信仰者はすべてイエスさまの弟子ですから、最初の弟子の招きの物語は、まさに私たちの信仰のスタートの物語です。信仰は、全く神の業、神の恵みの御業であることは確かです。決して人間自身の内側から出て来る確信のようなものではありません。だからマタイ、マルコ、ルカによる福音書は、イエスさまの突然の呼びかけとそれに瞬時完全に応答する弟子の姿として描いているのでしょ。しかしそれだけでは、信仰があたかも魔術的なものであるかのように誤解してしまう恐れがあります。神さまは私たち人間の一人一人を本当に大切に愛してくださっているのです、そこには信仰を自分のものとして持つに至る一人一人の物語がある。ヨハネによる福音書は、その一人一人の物語を強調して語っているのかもしれない。一人一人がいろいろなきっかけで、いろいろな思いをもってイエスさまに近づこうとする。その時に主の招きが聞こえて来る。私たちが信仰のスタートとして覚えているのは、ヨハネ福音書の招きの物語の方ではないかと思ひます。

一人一人の物語があり、一人一人がそれぞれに大切である。ヨハネによる福音書が、ペトロとアンデレの兄弟をセットにせず、アンデレの招きを先だとはっきり書いているのも面白いと思ひます。ペトロは十二弟子の中心人物で、福音書でも至るところに名前が登場しますが、アンデレはヨハネによる福音書以外では、ペトロとセットでしか書かれていないのです。しかしヨハネによる福音書だけは2つの物語でアンデレが登場しています。五千人の給食物語で、少年が差し出した二匹の魚と五つのパンをイエスさまに届けたのはアンデレでした。また、イエスさまに会いたいと願ったギリシア人の取次ぎをしてあげた一人はアンデレだったと語っているのです。ペトロと違って地味な働きだったであろうアンデレこそがイエスさまの一番弟子だと言っているかのようです。

私たちにも皆、ただ神の恵みの業として信仰が与えられました。そしてそれぞれ一人一人に大切な信仰のスタートがあり、信仰の物語があります。神さまが招いてくださったのですから、神さまが用いてくださいます。